第72巻1号 正誤 Errata of Vol. 72 No. 1

頁 (page)	行 (line)	誤 (For)	正 (Read)
36	↓2	***Ch. angusto ellipsoidea*, sp. nov,**	***Ch. angustoelllipsoidea*, sp. nov.**
36	↑18	*Chlorella angusto ellipsoidea*	*Chlorella angustoellipsoidea*
36	↑2	*Ch. angusto ellipsodia*	*Ch. angustoellipsoidea*
39	↓9	***Chlorella angusto ellipsoidea***	***Chlorella angustoellipsoidea***
41	↑5	*Chlorella angusto sllipsoidea*	*Chlorella angustoellipsoidea*
43	↑4	*Ch. angusto ellipsoidea*	*Ch. angustoellipsoidea*

新　刊

□大場秀章（監修・解説）瀬倉正克（訳）：シーボルト：**日本の植物** 296 pp. 1996. 八坂書房. ¥3,708.

P. F. B. von Sirebold, Flora Japonica (1835－1870) 2巻は151項目の植物についてのラテン語の記載とフランス語の覚え書き及び図を伴っている. 図版については木村陽二郎・大場秀章解説, シーボルト：フロラ・ヤポニカとして八坂書房 (1992) から出版されているが, 本書はそこでは省略されたフランス語の部分を訳したものである. 参考のために線画の図も縮小して加えてある. 151項目の内, 前半の127項目はシーボルトの書いたもので, 後半は F. A. W. Miquel がシーボルトのノートを参考にして編集したものである.

シーボルトの解説は詳細で, 植物の成育状態, 分布, 利用のされかた, 栽培の方法など自身で見たことや, 日本人から聞いたことなど様々なことが書かれている. 話を聞いたり標本を貰った人では水谷豊文, 宇田川榕菴, 伊藤圭介などが頻繁にでてくるし, 蝦夷地のものについては当時老齢となっていた最上徳内の見聞を伝えている. 植物の利用方法, 栽培方法, 遠隔地への種子の輸送方法など, 現在知られるていなかったり, 忘れられたりしている色々な事がらが記録されている貴重な報告である. 当時自由に旅行できなかった状態で, よくこれほどの情報を収集したものだと, その熱意に驚かされる. シーボルトは日本の地理・民芸などの情報の収集に熱心であったことは知られているが, 特に植物に関心が深かったことがうかがわれる.

シーボルトの覚え書きは学術的にも民族資料としても貴重なものであるので, 文中にでてくる地名, 人名, 植物の検討などは欠かせないものであるが, それに苦労したであろう訳者の努力が察せられる. しかしシーボルトの時代と現在とでは種類の認識に相違がある. その違いをもう少し丁寧に解説してくれると, 当時の知識の程度がわかり, 理解しやすいものになったであろう.

シーボルトはアジサイの仲間に深い関心を持ち多くの種類を書いているが, これらは現在種類として認められているものもあるし, 品種として扱われているものもある. シーボルトの種類が現在どう考えらているのかは, 表題の横に書かれている現在の学名を見ればわかると考えているのであろうが, 学名にあまり親しみのない一般の読者にはわかりにくいし, 煩わしいことである. アジサイの一品オタクサをシーボルトは種類として記述しているが, それと対比されたセイヨウアジサイは *Hydrangea hortensis* の名が頭注に挙げてあるだけなので, これではヨーロッパにこういう種類があると読者には受け取れられかねない. ガクソウ (ベニガク) は現在の学名の所を見ればヤマアジサイの一品であることがわかるが, シーボルトは別の項でヤマアジサイを書いているのに, むしろガクアジサイと比較している. 現在の学名 *Hydrangea serrata* がヤマアジサイだと気がつかない一般の読者はガクアジサイに近いものだと思ってしまう.

ノヒメユリの項で, 図はノヒメユリに間違いないのだが, 注に記してあるとおり,

解説にはヒメユリやコオニユリが混同されているようである．こうした混同や分布，成育地の誤りは一部では注で改正されているけれど，全般にわたって丁寧な注を入れることが望ましい．また文中に変種として書かれたり，栽培品と野生品とでは異なると指摘されているものが現在の何に相当するのかの考証も必要であろう．ミヤマシキミの項に出てくる野生品はツルシキミと考えられる．翻訳書にそこまでやる必要はなという見解もあるだろうが，学術書として書かれたものなのだから，正確な詳しい解説が必要である．

項目の見出しの和名はシーボルトの和名とは異なり，引用された図の現在使用されている和名にしている．シーボルトが和名を書かなかったものもあるから，統一するための方法ではあるが，やや厳密に現在の和名に拘泥したきらいがある．マルミキンカンはキンカンとして取り上げたほうが内容にも合うだろう，ツクシシャクナゲも同じである．シイの項では，図はスダジイだがシイとして項を立てているのだから，それと同じようにキンカン，シャクナゲと広い意味での和名にしたほうがよかったと思う．

大きな誤りがツクシシャクナゲの項にある．図は確かにツクシシャクナゲだし，説明の内容もツクシシャクナゲだけれど，シーボルトは和名をシャクナゲとしており，日本の北部高山に成育し，入手したものは日光から持ち帰ったものとしている．おそらくシーボルトのシャクナゲの概念は，日本人の話から得た知識で，ハクサンシャクナゲも混同されているのであろう．ツクシシャクナゲは本州の紀伊半島，四国，九州に分布し，日光のものはアズマシャクナゲである．ところが注では日光のものはシャクナゲ (ホンシャクナゲ) であるとしている．これはたまたま間違えてしまったのだと思うが，注の筆者がアズマシャクナゲはホンシャクナゲと呼ぶべきだと考えているとしたら，その理由を述べて使うべきである．

翻訳書に付き纏う問題に寸法の表現の仕方がある．文中に端数のものや小数点のつく寸法が頻繁にでてくる．これは整数で表現されたフランス語の寸法 pied，pouce の数字を正確にメートル，センチに置き換えたことによる．シーボルトは正確に何メートル何センチとか表現しているわけではないので，四捨五入して整数にするとか，ピエ，プースで書いて括弧してメートル，センチにしたほうが文を損なわないものと思う．

以上色々注文はあるけれど，価値の高い貴重な資料であることは変わりない．以前に出版された図版と共に一読をお奨めする．これとは関係ないけれど，アーネスト・サトウ編，明治日本旅行案内 (1884，全3巻の上巻，庄田元男訳，平凡社) が出版された．サトウ氏はよく知られているように，植物学者武田久吉氏の父である．英国公使館の書記官として日本各地を旅行し，日本の内実を国外に知らせることに努めた．上巻には F. V. Dickins の日本の植物の紹介がある．シーボルトやサトウのような，日本の文化の向上に貢献した人の著書が，容易に見られるようになった訳書の出版は意義深い．（山崎 敬）

□鈴木貞雄：**日本タケ科植物図鑑** 271pp. 1996. 自費出版．¥12,000

著者が1978年に刊行した日本タケ科植物総目録の改定増補版だが，元の出版社に再版の意思がなく，やむなく自費出版となったとのことである．前とほとんど同じ体裁だが，前著は A4版なのに対して本書は B5版となっており，したがって図版はやや縮小，種類ごとの分布図，写真，英文は割愛されている．扱われた種類は和名索引によると836，前書にない名前が60件ふえ，前書にみられた名前が34件減っている．栄養繁殖でおまけに栽培品や園芸品種が多く，誰もが敬遠し勝ちなタケ・サケ類を，永年かけてこうしてまとめられた著者の努力を多としたい．総目録のタクソンの見出しに各論の図版番号があると便利だと思った．新学名の提示はみられないが，種内での離合がかなり行われている．しかし品種レベルではまだ整理の余地がありそうだ．アズマネザサを例にとると次のとおり．購入希望者は，著者へ直接連絡されたいとのことである．連絡先は285千葉県佐倉市[redacted] (電話[redacted])．

（金井弘夫）